

MIGA コラム「新・世界診断」

## 音楽は平和を導くか —試される広島サミット—

岡部直明

武蔵野大学国際総合研究所客員研究員

元日本経済新聞主幹



1947年高知県生まれ。69年、早稲田大学政経学部卒、日本経済新聞社入社。東京本社編集局産業部、経済部記者を経て、ブリュッセル特派員、ニューヨーク支局長、取締役論説主幹、専務執行役員主幹、コラムニストを歴任。この間、早稲田大学大学院客員教授を務める。主な著書・編著に「ドルへの挑戦—Gゼロ時代の通貨興亡」「主役なき世界—グローバル連鎖危機とさまよう日本」「応酬—円ドルの政治力学」「ベーシック日本経済入門」（いずれも日本経済新聞出版社刊）、「EUは危機を超えられるか 統合と分裂の相克」（NTT出版、2016年）、「分断の時代—混迷する世界の読み解き方」（日経BP、2019年）ほか。

世界的音楽家である坂本龍一が亡くなって1カ月がたつ。坂本を生んだ日本の音楽界には平和の系譜がある。伊福部昭、早坂文雄、武満徹そして外山雄三からバトンを受け継いでいる。世界はいまウクライナ戦争で核の危機に直面している。音楽は混迷し分断する世界をどこまで変え、平和を導けるか。

「核兵器なき世界」を掲げる広島サミット（主要国首脳会議）は人類の知恵と感性が試されている。

### 牧野富太郎のもうひとつの遺産

NHKの朝ドラ「らんまん」は土佐の山里、高知県佐川町が生んだ世界的植物学者、牧野富太郎の波瀾万丈の物語だ。牧野は植物の世界で大きな遺産を残したが、もうひとつの遺産にも注目していい。音楽好きだった牧野は佐川小学校にオルガンを寄贈するなど高知の音楽教育に尽力する。幼馴染で東京で牧師になった外山頼寛の息子、外山国彦は牧野の勧めで東京音楽学校（現東京芸術大学）に学ぶ。そして、声楽で日本の草分けになる。牧野は外山国彦の演奏会に顔を出すなどパトロンぶりを発揮している。日本は明治維新で西洋音楽の取り入れを急ぐが、牧野のような愛好家の存在は大きかった。

### 外山国彦が築いた音楽人脈

その外山国彦はテノール歌手にとどまらず、日本音楽界の開拓者になる。大作曲家になる山田耕筰は東京音楽学校の先輩、外山国彦を「天才肌」と尊敬し、「腰ぎんちゃくのようにについて回った」と高知新聞の大宅充昭編集委員が書いている。「荒城の月」や「花」で知られる滝廉太郎との縁もある。佐川町出身で外山の縁続きである林八枝も東京音楽学校で学んだが、「荒城の月」を作詞した土井晩翠と結婚することになる。オペラ

「蝶々夫人」で世界的なプリマになる三浦環は、東京音楽学校で滝廉太郎にピアノを教わっている。

外山国彦は、佐川人脈の歌手も育てた。オペラ歌手の下八川圭祐から流行歌手の楠木繁夫まで幅広い。

### 外山雄三から坂本龍一へ

外山国彦の息子が、NHK交響楽団の指揮者などをつとめた外山雄三だ。日本音楽界の重鎮のデビューはN響の戦後初の海外演奏旅行である。「管弦楽のためのラプソディ」は八木節をテーマにした軽快な曲で喝采を浴びる。それは戦後音楽界の海外デビューでもあった。

外山雄三は平和主義者としても知られ、トルコの詩人、ナジム・ヒクエットの詩を作曲する。「死んだ女の子」はヒロシマで爆死した7歳の女の子をうたう。「炎が子供を焼かないように。あまいあめ玉がしゃぶれるように」と平和を訴える。

この「死んだ女の子」を坂本龍一が編曲し、元ちとせが歌ってヒットした。外山雄三から坂本龍一への引き継ぎを担ったのは、元ちとせの音楽事務所社長で音楽プロデューサーの森川欣信である。森川が高知出身なのも縁だろう。

坂本龍一は「戦場のメリークリスマス」「ラストエンペラー」という映画音楽の作曲で世界的存在になり、YMO（イエロー・マジック・オーケストラ）を細野晴臣、高橋幸宏と結成して人気を集めた。なにより、音楽家の鋭い感性で反核と平和を訴え続けた人生だった。病魔に侵されながら、神宮外苑の樹木伐採計画に反対する環境活動家でもあった。

### 伊福部昭、早坂文雄、武満徹

日本音楽界には、北海道発の平和の源流がある。伊福部昭が映画「ゴジラ」の作曲をあえて引き受けたのは、北海道大学林学科出身で林政官だった伊福部が戦時中の放射線実験による被ばく体験があったからだ。北海道で伊福部とともに音楽を学んでいた早坂文雄は黒沢明監督の「七人の侍」の音楽で世界的になったが、核実験による福竜丸事件を題材にした黒沢監督の「生きものの記録」の音楽を構想しているさなかに急逝する。早坂の死を悼み、武満徹が作曲したのが「弦楽のためのレクイエム」である。

武満徹はベトナム戦争のさなかに谷川俊太郎の詩「死んだ男の残したものは」に曲をつけ、いまでも歌い継がれている。

### バッハの発見

危機の時代にあって、いま世界中の人々が音楽の父、バッハに吸いよせられている。そこには厳粛な祈りがあるからだろう。

バッハはヘンデルやスカルラッチェと同じ年に生を受けたが、教会音楽家に徹して、ほとんど世に知られていなかった。そのバッハを発見したのは14歳のメンデルスゾーンだった。バッ

ハ自筆の「マタイ受難曲」を手に入れる。演奏会で世に出したのはバッハの死後100年後だった。

いま「マタイ受難曲」は、バッハの代表曲として現代の人々の心を揺さぶる。日本でも鈴木雅明率いるバッハ・コレギアム・ジャパンの名演に涙する。

「無伴奏チェロ組曲」は、12歳のパブロ・カザルス少年がバルセロナの楽器店で発見する。この6曲はすべてのチェリストの究極の目標になっている。カザルスはカタロニア民謡「鳥の歌」も作曲した。鳥たちは「ピース、ピース、ピース」と歌うと述べている。

### 「音楽大国」に生き残りの道

ウクライナ戦争でロシアの衰退は目に見えている。侵略されたウクライナも日米欧もウクライナからの全面撤退を求めている。プーチン後の世界では、ロシアは軍事大国の座を放棄せざるをえなくなるだろう。

そのロシアは音楽大国として大きな遺産を抱えている。チャイコフスキー、ラフマニノフからショスタコービッチ、ストラビンスキーまで。古典から現代音楽まで網羅する。ポリショイ、マリインスキーなどバレエの聖地でもある。

その一方で異色の民族楽派も目立っている。ムゾルグスキーの「展覧会の絵」の終曲は「キーウの大門」である。この壮大な曲はロシア人のキーウへのあこがれを表している。だとすれば、古都キーウを攻撃し、破壊するのではなく、キーウの文化遺産を守ることだろう。

プーチン後のロシアが生き残る道は、ハードパワーではなくソフトパワーである。

### 「核兵器なき世界」へ道標示せ

世界はいまウクライナ戦争での核の脅威にさらされている。プーチン大統領の威嚇で核の危機は高まった。北朝鮮は再び核実験を実施するかもしれない。

こんな核危機の時代だからこそ、人類は「核兵器なき世界」をめざさなければならない。戦後、米国の外交・安全保障を担ってきたキッシンジャー、シュルツ、ペリー、ナン氏の提言を受けて、オバマ米大統領が世界に提唱した。岸田文雄首相がサミットの広島開催を決めたのもこの「核兵器なき世界」に共鳴したからだろう。それは唯一の戦争被爆国として当然の選択である。

いま日本には一部に「核共有」論があるが、ありえない選択である。冷戦末期に、北大西洋条約機構（NATO）はソ連の核ミサイル配備に対抗して、西欧諸国に米核ミサイルを配備したが、これは米ソ間の核軍縮を促すためだった。ヘルムート・シュミット西独首相が打ち出した「二重決定」は、西欧の反核運動を巻き込んだ核軍縮に主眼が置かれていた。米ソの中距離核戦力（INF）全廃条約の背景にあったのは、筆者が日本経済新聞の欧州駐在のころ目撃した反核運動だった。

2023年4月24日

広島サミットは少なくとも「核兵器なき世界」への道標を示すことが求められる。米口中の核軍縮の枠組みづくりを急ぎ、核兵器全廃につなげる。それは核危機の時代に生きる首脳たちの地球責任である。

試されているのは、平和への首脳たちの政治的意思と感受性である。まずは、首脳も世界から広島に集まる記者も外山雄三作曲・坂本龍一編曲の「死んだ女の子」を聞いてみることだ。